

ハイエク全集 別巻 F.A.ハイエク著「隷属への道」春秋社

2008年12月25日刊 西山千明著訳者 あとがき「ハイエクとシカゴ学派」を読む

ヘリコプター・マネーとは

1. 「ヘリコプター・マネー」とは、サムエルソンが「深刻な不況の際には政府が財政支出によって人々の所得を増額させて、それらの人々の消費を刺激すべきだ」と強く主張したのに対し、「こんな主張はヘリコプターで見境なしに金を人々にばらまけ」と主張している暴論に等しいと、フリードマンから批判された際の表現だった。
2. 「ヘリコプター・マネー」は、政府による財政援助金が「誰の懐」にはいるかに関する論戦であって、誰の懐にはいるかが、公的資金の投入は経済危機を乗り切らせてくれるものの、長期的には人々の実質所得水準を必ず引き下げるという「本質論」に関するものではない。つまり「公的資金」と呼ぼうが、「財政資金」と呼ぼうが、「ヘリコプター・マネー」と呼ぼうが、どんな名で呼んだところで、「金は決して天から降ってこない」のだ。この冷徹な事実は、どんな有名な経済学者の名を振り回そうが、どんな権力で弾圧しようが、どんな体制で締め上げようが、変えることができない。
3. このことを世界の人々は、かつての大恐慌以降にいやというほど身に染みて、経験させられた。ナチズムやファシズムといった国家社会主義は、要するところすべての国民を「まったくの駒」にしてしまい、あらゆる生産手段は国家に帰属させたあげくに、自己倒壊してしまった。米国のニュー・ディールは、1929年の株式大暴落をきっかけとして、米国に勃発した金融恐慌から、米国を再生させたと1940年代には言われていた。しかし、フリードマンは米国の貨幣の歴史についての大著によって、詳しい分析をおこなって、米国の大恐慌はルーズヴェルト大統領が断行した「銀行閉鎖」によってこそ、勃発することになった経緯を実証的に明らかにした。そしてこの大恐慌の波及が、世界的な経済活動の停滞や不活発化あるいは経済衝突等となって、発生していくことになったのだ。

[コメント]

財政の無秩序な大幅出動が何を意味するかを考える上で、ハイエクの「隷属への道」を読み直し、「ヘリコプター・マネー」を理解することは大いに参考になる。

- 2009年1月25日林明夫記 -